



監督＝ボアズ・イエーキン／出演＝ブリタニー・マーフィ／ダコタ・ファニング／マーリー・シェルトン／ジェシー・スペンサー（20世紀フォックス映画配給／2003年アメリカ映画／93分）

22歳の「元」お嬢さまの美女モリーと、8歳の「現」お嬢さまの美少女レイのコンビによる、現代風ファンタジー。最初は反発しあっていたこの2人が、どのように心の扉を開き、大人（？）の、そして女同士の友情を築いていくのか……？ レイを演ずる『アイ・アム・サム』の天才少女ダコタ・ファニングの演技はさすがだが、俺にはやっぱりラブ・コメディの方がいいかな……？

🎬「元」お嬢さまは22歳の美女

モリーは、今は亡き伝説のロックスター、トミー・ガンの娘。父の遺産を1人で受け継いだモリーは、お城のような高級アパートで、贅沢三昧かつ自由気ままな1人暮らし。いや、ちがう。相棒は1人、いや1匹のペットのブタ、「ムー」だ。

今日は、モリーが最も信頼する女友達のイングリッド（マーリー・シェルトン）が企画した、モリーの誕生パーティー。そこには、いるワいるワ。セレブなモリーの誕生日を祝って、数多くの男女が集結……。もちろん、アパートの廊下は花とプレゼントだらけで、管理人から苦情が出る始末……。

このパーティーでモリーがひと目惚れしたのは、舞台上歌う若手ミュージシャンのニール（ジェシー・スペンサー）。「禁酒、禁オンナ」を誓っていたはずのニールは、ハチャメチャなモリーの誘惑の前にたちまちダウン。さすが天衣無縫なお嬢さまの「実行力」はすごい。しかし世の中には悪いヤツがいるもの。父親が

残した莫大な遺産は、財産管理を依頼していた会計士が持ち逃げ！ いくら告訴をしても、損害賠償をしても、結果的に無駄と言われて、モリーは啞然とするが、現実が現実。モリーはたちまち一文無しとなり、アパートを追い出され、イングリッドの部屋に転がり込む羽目に。

このモリーに扮するのは、『サウンド・オブ・サイレンス』(01年)でシリアスな役を、『ジャスト・マリッジ』(03年)ではコミカルな役をうまく演じ分けた、最近人気急上昇のブリタニー・マーフィ。この映画でもコミカルな味を存分に出している。

♣「現」お嬢さまは8歳の美少女

そんなモリーがトイレの中で出会ったのは、8歳のガキ、いや美少女、レイ。ところがレイは、トイレの鏡に向かって額のシワを気にしているモリーに対して、ズケズケとイヤミを。もっともモリーも負けてはいない。8歳の子供のクセに、潔癖症で、石けん持参、衛生状況ばかり気にしているレイに対して、モリーもガツンと一発。でもやっぱり、若い女(?)の方が強い。その優劣、勝敗は明らかだ。

このレイを演ずるのは、あの『アイ・アム・サム』(01年)で全世界の観客をとりこにした美少女ダコタ・ファニング。レイは大きなお屋敷に住む「現」お嬢さまだが、その母親のローマ(ヘザー・ロックリア)は敏腕音楽プロデューサーで超セレブ。そのため、仕事が忙しく、娘をかまうヒマなどなく、娘は子守りにまかせっきり。だから、レイは経済的には恵まれているものの孤独で、遊園地にも行ったこともなく、母親の愛情に飢えていた。

♣「子守り」として大奮闘のモリー

仕事に就かなければならないモリーのため、親友のイングリッドはさんざん骨を折って努力するが、こんなワガママなお嬢さんには基本的にどんな仕事もムリ。これにはさすがのイングリッドもキレた。そのため次第に2人の仲も険悪に……。そんなモリーが就いた仕事は、何と、レイの子守り役。潔癖症のレイと、およそ片づけることなど知らないモリーとが、うまくやっっていけるはずがない。

予想どおり、大ゲンカのあげく、モリーは捨てゼリフを残して、「やめた」となった。しかし現実にはホントにきびしい。あのお嬢さまのモリーも、就職難には勝てず、再度レイの子守りのお仕事に……。そんな中、モリーの粗雑さを嫌っていたレイも、次第にモリーの愛情を感じ始めた。そして他方モリーも、母親の愛に飢えたレイの本当の姿を知り、親身になって接していくことに。こうして2人の「仲」は好転した……。

ラストはバレエの発表会

モリーとレイの女同士(?)の心の交流を生んだ原因は、2人とも母親の愛情に飢えていたこと。そしてそれを癒す場所は、モリーにとっては遊園地のティーカップだった。家で休んでいるレイを無理やり遊園地に誘い出し、吐くほどに思い切りクルクルとティーカップで回った2人は、殴り合った後、女同士の抱擁へ……。

レイの趣味は音楽とバレエ。一生懸命練習に精を出しても、今までその発表会に母親の姿はない。ところで、期待(?)していたモリーの姿は……?

この映画のラストは、再びバレエの発表会。そこには当然のようにモリーの姿。そしてエンディングには、何と、今は大人気を獲得しているニールの登場だ。ニールは、尊敬するかつてのロックスター、トミーが娘モリーに捧げた歌を熱唱し、これに合わせてレイたちはギターを抱えて奇妙な(?)バレエダンスを踊った。これによりモリーを中心とした各種の人間関係すべて一件落着。めでたし、めでたしだ……。

総評

ハリウッド発のラブ・コメディは数多いが、女同士の「心の交流」を描いた映画はそれほど多くない。『アイ・アム・サム』は知恵遅れの父親と7歳の娘との心の交流をテーマにした泣かせる名作だったが、この映画は、前述のと通りの現代風「ファンタジー」。そういう映画として楽しめばまずまずの作品だが、私としてはやはり、ラブ・コメディの方が楽しくていいかなという感じ……。

2004(平成16)年2月5日記